

七～八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静 —日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論—

植田 喜兵成智

本稿は、新羅の「築城」記事を分析することで、7世紀から8世紀にかけての新羅の軍事的動静について明らかにするものである。この分析を通じて、当時の東アジアの国際情勢と新羅の軍事動向がどのように関連しているのかを整理できるだろう。また、新羅の「築城」記事および軍事的動静を検討することは、同時期に築造された、鞠智城をはじめとした、日本の古代山城を理解するうえにも有益であると考えられる。

従来、日本の古代山城建設は、白村江の敗戦後、唐や新羅からの攻撃を警戒して建設されたものと考えられてきた。第一義的には、そのような目的のもと建設されたと理解してよい。しかし、670年代には新羅と唐の対立が深刻化しているように、白村江の戦いの直後に比して朝鮮半島情勢は大きく変化している。それゆえ、670年以降はすでに唐や新羅の攻撃に備えるという対外情勢ではなかった可能性が高く、激変する東アジア情勢をみすえた検討が必要である。

また『続日本紀』によれば、698年、鞠智城、大野城、基肄城が「繕治」されたという。660年代に最初に山城が建設されてから、すでに国際情勢が大きく変化したなかで修繕・改築されたこととなる。では、なぜこのような時期に古代山城が改築されたのだろうか。

そこでこれまで十分に注目されてこなかった新羅の「築城」記事とその軍事的動静に注目したい。新羅がどのような情勢で軍事施設を建設し、どのような軍事的戦略を構築しようとしたのかを明らかにする。これによって、日本の古代山城の築城、改築の背景やその変化についてもその外的要因とその関連性を明らかにできると考えている。

検討の結果、『三国史記』新羅本紀にみられる7～8世紀の「築城」記事は、当時の国際情勢に応じた新羅の軍事拠点建設の様子を示していた。対百済戦争、対唐戦争終結後の新羅の主たる戦略的関心が北方に移ったことは、「築城」記事から看取できる。この事実は、新羅が実際に倭(日本)への軍事的作戦を実行する可能性が低かったことを意味する。それゆえ、698年の「繕治」は新羅に対する防衛戦略とは別の目的で行われたものとみなすべきであろう。

七～八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静 —日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論—

早稲田大学文学学術院 植田 喜兵成智

はじめに

○ 本研究の目的

新羅の「築城」記事を分析することで、7世紀から8世紀にかけての新羅の軍事的動静について明らかにする。この分析を通じて、当時の東アジアの国際情勢と新羅の軍事動向がどのように関連しているのかを整理する。また、新羅の「築城」記事と軍事的動静を検討することは、同時期に築造あるいは改築された、鞠智城をはじめとした、日本の古代山城を理解するうえにも有益である。

○ ねらい

従来説:白村江の敗戦後、古代山城は唐・新羅の侵攻に備えるために建設
→670年代以降、新羅と唐は対立して戦争状態になるように朝鮮半島・東アジア情勢は変化
⇒690の鞠智城、大野城、基肄城の「繕治」はいかなる情勢下のもとで行われたのか?
⇒⇒新羅の軍事的動静を詳細に検討 ※分析対象として新羅の「築城」記事に注目

1 問題の所在

(1) 共通理解の確認

○ 日本の古代山城関連記事

『日本書紀』天智3年(664)条

是歳。於対馬・壱岐島・筑紫国等、置防与烽。又於筑紫築大堤貯水。名曰水城。

『続日本紀』文武2年(698)5月条

甲申(二十五日)。令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三条。

『続日本紀』大宝元年(701)8月条

丙寅(二十六日)。廢高安城。其舍屋・雜儲物移貯于大倭・河内二国。

『日本三代実録』元慶3年(879)3月条

十六日丙午。(略)又肥後国菊池郡城院兵庫戸、自鳴。

→663年の白村江の戦い以後に築城 →698年に改修・701年以降に廃止記事

→8～9世紀、大野城、鞠智城などの記事 →9世紀後半に鞠智城の最後の記事

○戦後の日本の文献史・考古学

通説:白村江の敗戦後、唐・新羅と対立した国際情勢の悪化のなかで建設

→国際的緊張感が弱まると廃止 → 一部は他の目的に転用=機能・役割の変化

……山城築造白村江以前説 在地首長関与説 地方支配拠点説 九州地方勢力牽制説

考古学の成果などから山城の規模や役割の変化などが明らかになりつつある

⇒ミクロな視点での古代山城の築造背景に関してはおおむね賛同

⇔山城の建設に関する国際的背景については、通説的理解が依然として根強い

問題点①:新羅側の視点の欠如

問題点②:7～8世紀の東アジアの国際情勢とその変化に対する理解不足

(2) 近年の対外関係史の視点からの研究と問題点

熊本県所在の鞠智城を中心に検討が進展

柿沼亮介……対外関係史。外交機能。地方豪族の外交を牽制する機能

⇔新羅の視点が十分に反映されていない

新飼早樹子……新羅の情勢に注目。8世紀に張保皋・海賊の横行に対応して機能変化

⇔7世紀の情勢理解についてはややステレオタイプ

近藤浩一……韓国の山城(二聖山城など)の構造と比較し、鞠智城の機能理解

⇒新羅との交流の観点から、新羅の山城からの影響を指摘

→新羅の視点、朝鮮語の文献や韓国側の考古学的研究成果も考慮される

⇔諸論考においてもその視点、分析する対象と参照する先行研究に偏りがあると思われる

問題点③:韓国の文献史側からの山城・土城研究を十分に検討できていない

問題点④:7～8世紀における新羅の軍事動向について検討されていない

(3) 韓国学界の研究と問題点

考古学分野

……個別の山城、土城などの発掘成果が報告 →日本の山城研究にも影響

文献史分野

……城の位置比定…地理志と考古学成果に基づいて城と名称を推定

軍事史的観点…新羅の軍事防御体制を推定

社会史・政治史的観点…県城など行政拠点・祭祀の対象としての山城

→新羅の「築城」背景を分析し、その目的や防御網を推定。山城の役割・機能も分析

⇒あくまでも韓国国内の研究成果に依拠し、史料も新羅関連のものを中心に利用

問題点⑤:日本の古代山城との比較という視点は無い

問題点⑥:7～8世紀という通時代的な視点はあまり見られない

⇒⇒新羅の「築城」記事を網羅的に分析し、新羅の軍事的動静について整理する

2 「築城」記事と城の所在地

(1) 670年代以前

【史料A】『三国史記』卷4・新羅本紀4・真平王48年(626)条 ※以下「羅紀」と省略

築高墟城。

【史料B】羅紀5・武烈王3年(655)条

三年。金仁問自唐歸、遂任軍主、監築獐山城。

【史料C】羅紀6・文武王元年(661)9月条

築熊峴城。

【史料D】羅紀6・文武王3年(663)春正月条

三年春正月。作長倉於南山新城。

【史料E】羅紀6・文武王3年(663)春正月条

築富山城。

(2) 670年代

【史料F】羅紀7・文武王12年(672)8月条

築漠山州、畫長城、周四千三百六十步。

【史料G】羅紀7・文武王13年(673)2月条

二月。增築西兄山城。

【史料H】羅紀7・文武王13年(673)8月条

增築沙熱山城。

【史料I】羅紀7・文武王13年(673)9月条

九月。築國原城①(古亂長城)・北兄山城②・召文城③・耳山城④・首若州走壤城⑤(一名迭巖城)・達含郡主岑城⑥・居烈州萬興寺山城⑦・歆良州骨爭峴城⑧。

【史料J】羅紀7・文武王15年(675)9月条

緣安北河設關城。又築鐵關城。

【史料K】羅紀7・文武王19年(679)8月条

增築南山城。

(3) 680～690年代

【史料L】羅紀8・神文王7年(687)秋条

秋。築沙伐・歆良二州城。

【史料M】羅紀8・神文王9年(689)秋閏9月26日条

秋閏九月二十六日。幸獐山城、築西原京城。

【史料N】羅紀8・神文王11年(691)条

築南原城。

【史料O】羅紀8・孝昭王3年(694)冬条

冬。築松岳①・生岑②二城。

(4)720年代

【史料P】羅紀8・聖德王12年(713)12月条

築開城。

【史料Q】羅紀8・聖德王20年(721)7月条

二十年秋七月。徵何瑟羅道丁夫二千、築長城於北境。

【史料R】羅紀8・聖德王21年(722)10月条

築毛伐郡城、以遮日本賊路。

(5)760年代

【史料S】羅紀9・景德王21年(762)5月条

二十一年夏五月。築五谷①・鵠巖②・漢城③・獐塞④・池城⑤・德谷⑥六城、各置太守。

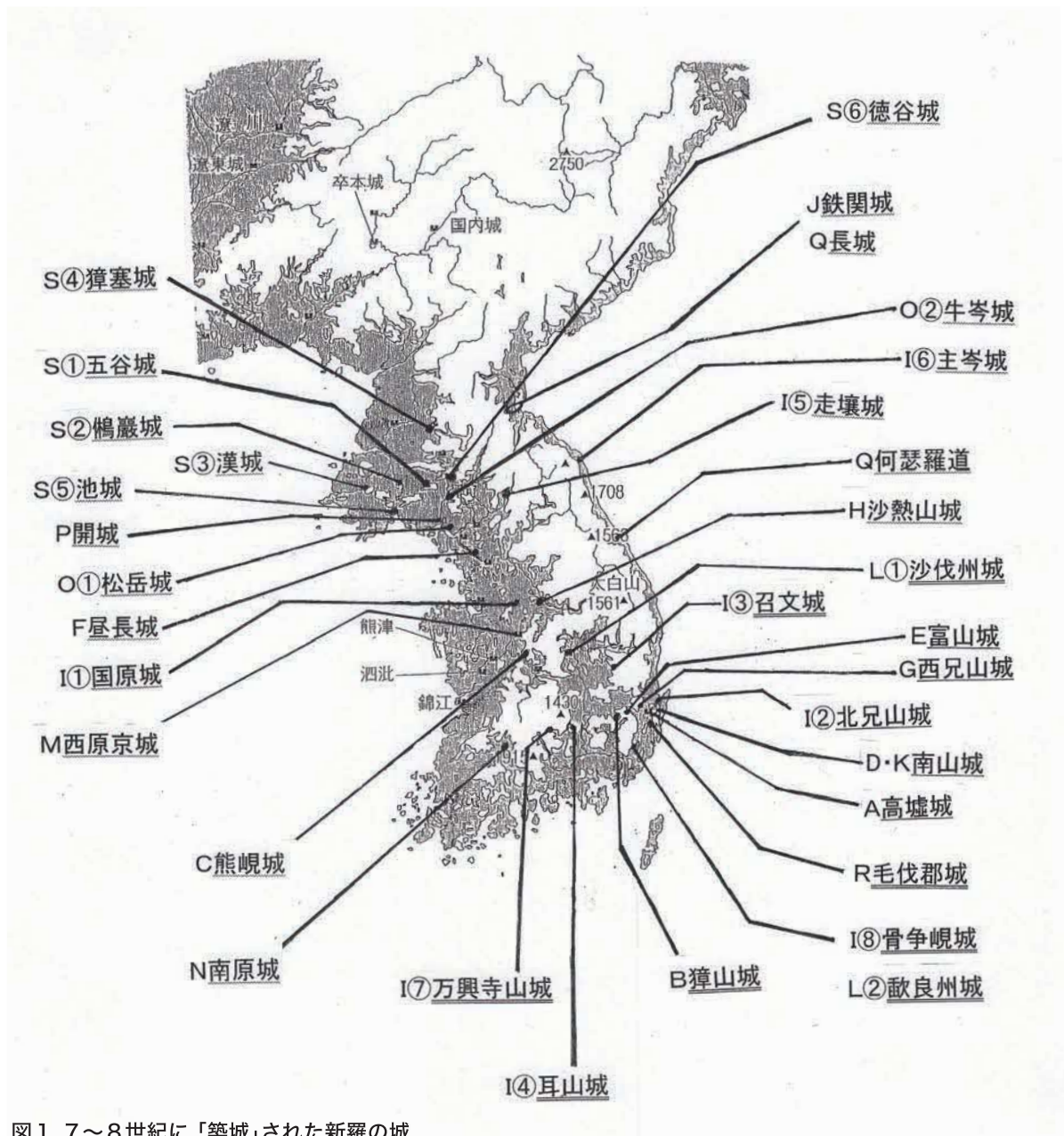


図1 7～8世紀に「築城」された新羅の城

3 新羅の軍事動向とその変化

<記号の意味>

○○城…新羅王都周辺のもの

○○城…三国統一以前より新羅の領域だったもの

○○城…旧百済・高句麗領内だったもの

(1)670年代以前:王都防衛と百済攻略

660 百済滅亡 663 白村江の戦い 668 高句麗滅亡

A高墟城…例外。王都付近 ⇒王都防衛

B獐山城…王都から百済への要衝。百済との抗争中 ⇒王都防衛

C熊岷城…百済の旧都・熊津付近。百済遺民との抗争中 ⇒百済方面への拠点

D南山新城・E富山城…王都周辺。百済遺民との抗争中 ⇒王都防衛

(2)670年代:羅唐戦争期の軍事拠点

670 高句麗遺民蜂起 670～676 羅唐戦争

☆672.8 石門の戦い ☆678 新羅再征討計画中止 ☆679 四天王寺完成

F昼長城…現在の南漢山城。唐軍に敗戦直後 ⇒漢江の防衛拠点

G西兄山城・I②北兄山城…王都周辺の山 ⇒王都防衛

I③召文城・I④耳山城・I⑦万興寺山城…王都の西側。唐軍侵入路 ⇒王都防衛

I⑧骨争岷城…王都の南側。南からの進入路 ⇒唐からの王都防衛 ※倭軍ではない

H沙熱山城・I①國原城…西海岸。旧百済領 ⇒唐の西側進入路の防衛

I⑤走壤城・I⑥主岑城…東海岸。旧高句麗領 ⇒唐の東側進入路の防衛

J安北河関城・鉄関城…東海岸。戦争末期 ⇒唐の東側進入路の防衛

K南山城…王都付近。戦争終結後 ⇒王都防衛

(3)680～690年代:唐との没交渉と地方支配の拠点

681～692 神文王代 690～705 武周期 690年代 北進と羅唐交渉再開 698 渤海建国

L沙伐・歙良…王都の南と西北。「州城」 ⇒行政的な拠点

M西原京城・N南原城…九州五京 ⇒地方支配の拠点

O①松岳・O②生岑…臨津江の北方。羅唐戦争主戦場より北 ⇒北進

→朝鮮半島では新羅の支配が地方にまで波及し、安定化した状況

⇒新羅と友好的な倭の立場からすれば、朝鮮半島に対する警戒を解く方向へ転換?

(4)720年代:渤海の隆盛と日本への警戒

698 渤海建国 705 唐再興 ☆703 新羅・唐関係回復 ∴以降、連年遣使

☆732前後 新羅・倭(日本)関係の悪化

P開城…西海岸 ⇒北進

Q何瑟羅道…長城建設。東海岸 ⇒北進

R毛伐郡城…722年。倭(日本)の侵攻に備えて建設 ⇒対日本の防衛拠点

⇒698年の大野城、基肆城、鞠智城の改築の背景は？

⇒可能性①:7世紀末からの東アジア情勢変化に備え、倭(日本)側が軍事拠点の再整備

⇔安勝の高句麗国の存続と廃止(670～683) ∴倭(日本)との関係

可能性②:軍事的緊張緩和にともなう別機能に転換するための再整備

【史料】『三国史記』卷8・新羅本紀8・孝昭王7年(698)条

三月。日本國使至、王引見於崇禮殿。

⇒「繕治」の同年に新羅王が日本の外交使節と会見している点に注目

(5)760年代:新羅の北進

782 湔江鎮典設置

S①五谷・②鵠巖・③漢城・④獐塞・⑤池城・⑥德谷…礼成江から載寧江 ⇒北進

→これ以降、8世紀の新羅側の「築城」記事は確認できない

⇒倭(日本)に対する軍事拠点の建設が確認できるのはR毛伐郡城のみ

対百済・対唐戦争、北進など新羅の軍事的展開・防衛政策に関連して「築城」記事確認

⇒⇒新羅は対日本の防衛、あるいは攻撃する具体的な計画をもっていなかった

むすびにかえて一仮説と今後の展望

仮説①:『三国史記』所載の「築城」記事の史料価値

7～8世紀の「築城」記事…当時の国際情勢に応じた新羅の軍事的動静を示す

⇒新羅の「築城」記事が同時代の情勢を反映したものと理解できる ∴同時代性

仮説②:新羅の主たる軍事的関心

対百済戦争、羅唐戦争終結後において主たる「築城」は北方で展開

倭(日本)への軍事的作戦を実際に行う可能性が低い

⇒698年「繕治」の意味 ⇒⇒対新羅の防衛戦略とは別の目的

課題・展望①:新羅との交流と山城の機能

7世紀後半の新羅と倭(日本)の友好的な交流関係 + 新羅の城の機能とそれとの類似性

⇒新羅の祭祀制度・地方制度と関連させて議論する必要

課題・展望②:東アジアの観点から山城・鞠智城をとらえる

鞠智城もふくめた古代山城については、日本国内に局限された視点では解決できない

⇒東アジアをはじめ世界史的な視野からとらえなおす作業が必要